

1. アビブの月を守り、あなたの神、主に過越のいけにえをささげなさい。アビブの月に、あなたの神、主が、夜のうちに、エジプトからあなたを連れ出されたからである。
2. 主が御名を住まわせるために選ぶ場所で、羊と牛を過越のいけにえとしてあなたの神、主にささげなさい。
3. それといっしょに、パン種を入れたものを食べてはならない。七日間は、それといっしょに種を入れないパン、悩みのパンを食べなければならない。あなたが急いでエジプトの国を出たからである。それは、あなたがエジプトの国から出た日を、あなたの一生の間、覚えているためである。
4. 七日間は、パン種があなたの領土のどこにも見あたらないようにしなければならない。また、第一日目の夕方にいけにえとしてほふったその肉を、朝まで残してはならない。
5. あなたの神、主があなたに与えようとしておられるあなたの町囲みのどれでも、その中で過越のいけにえをほふることはできない。
6. ただ、あなたの神、主が御名を住まわせるために選ぶその場所で、夕方、日の沈むころ、あなたがエジプトから出た時刻に、過越のいけにえをほふらなければならない。
7. そして、あなたの神、主が選ぶその場所で、それを調理して食べなさい。そして朝、自分の天幕に戻って行きなさい。
8. 六日間、種を入れないパンを食べなければならない。七日目は、あなたの神、主へのきよめの集会である。どんな仕事もしてはならない。
9. 七週間を数えなければならない。かまを立穂に入れ始める時から、七週間を数え始めなければならない。
10. あなたの神、主のために七週の祭りを行ない、あなたの神、主が賜わる祝福に応じ、進んでささげるささげ物をあなたの手でささげなさい。
11. あなたは、あなたの息子、娘、男女の奴隷、あなたの町囲みのうちにいるレビ人、あなたがたのうちの在留異国人、みなしご、やもめとともに、あなたの神、主の前で、あなたの神、主が御名を住まわせるために選ぶ場所で、喜びなさい。
12. あなたがエジプトで奴隷であったことを覚え、これらのおきてを守り行ないなさい。
13. あなたの打ち場とあなたの酒ぶねから、取り入れが済んだとき、七日間、仮庵の祭りをしなければならない。
14. この祭りのときには、あなたも、あなたの息子、娘、男女の奴隷、あなたの町囲みのうちにいるレビ人、在留異国人、みなしご、やもめも共に喜びなさい。
15. あなたの神、主のために、主が選ぶ場所で、七日間、祭りをしなければならない。あなたの神、主が、あなたのすべての収穫、あなたの手すべてのわざを祝福されるからである。あなたは大いに喜びなさい。
16. あなたのうちの男子はみな、年に三度、種を入れないパンの祭り、七週の祭り、仮庵の祭りのときに、あなたの神、主の選ぶ場所で、御前に出なければならない。主の前には、何も持たずに出てはならない。
17. あなたの神、主が賜わった祝福に応じて、それぞれ自分のささげ物を持って出なければならない。
18. あなたの神、主があなたに与えようとしておられるあなたのすべての町囲みのうちに、あなたの部族ごとに、さばきつかさと、つかさたちを任命しなければならない。彼らは正しいさばきをもって民をさばかなければならない。
19. あなたはさばきを曲げてはならない。人をかたよって見てはならない。わいろを取ってはならない。わいろは知恵のある者の目をくらませ、正しい人の言い分をゆがめるからである。

20. 正義を、ただ正義を追い求めなければならない。そうすれば、あなたは生き、あなたの神、主が与えようとしておられる地を、自分の所有とすることができる。
21. あなたが築く、あなたの神、主の祭壇のそばに、どんな木のアシェラ像をも立ててはならない。
22. あなたは、あなたの神、主の憎む石の柱を立ててはならない。

説教

申命記 16 章はイスラエルの三大祭りについての教えです。1～8 節は「過越の祭り」、9～12 節は「七週目の祭り」、13～15 節は「仮庵の祭り」について教えられます。天幕生活をしていたこの時には、宿営の中央に幕屋があり、そこに行ってこれら三つの祭りを行いました。その後カナンに定住してからは、散らばっていた各地から幕屋あるいは神殿に巡礼の旅をして祭りに参加しました。わざわざそうやって参加するほど、これら三つの祭りは大切なものでした。

「アビブの月を守り、あなたの神、主に過越のいけにえをささげなさい。アビブの月に、あなたの神、主が、夜のうちに、エジプトからあなたを連れ出されたからである。」(1) 「過越の祭り」はイスラエルがエジプトを脱出した夜を記念する祭りです。イスラエルがエジプトを脱出したその夜、エジプト中の初子が神の呪いを受けて死にました。しかし、小羊を屠ってその肉を食べ、その血を「家の入口の二つの柱と、かもし」に塗ったイスラエルの家には災いが過ぎ越しました。そうして、イスラエルは、焼いて調理した小羊の肉に、発酵する時間なく焼いた即席の「種なしパン」と苦菜を添えて食べた後に、エジプトを脱出したのでした。

「アビブの月」は、太陽暦では 3 月から 4 月に当たりますが、神はその月をユダヤの暦の「一月」と定めます。イスラエルにとっては、エジプトを脱出して自由になったその日こそ、自分たちが滅びから救われた原点でありました。それで、「アビブの月」に「過越のいけにえをささげるよう」命じられます。それも、かの日を思い出すため、「エジプトから出た時刻」に合わせて、「夕方、日の沈むころ」に過越のいけにえを屠り、朝まで残さず夜のうちに食べ尽くすよう言われるのです。

3 節では「過越の祭り」を守る理由が次のように説明されます。「それは、あなたがエジプトから出た日を、あなたの一生の間、覚えているためである。」「あなたの一生の間」と言われるように、神がエジプトから救い出してくださった恵みは、私たちがこの世にいのちある限り生涯忘れてはならないのです。勿論、週に一度の安息日は、出エジプトの恵みを思い出すためにこれを聖別することを命じられました。でも、週に一度に加えて、年に一度は、巡礼の旅にはるばる出かけて行って、全イスラエルが集結して盛大に「過越の祭り」を守ることで、自分たちの救いの原点を思い出すようになされたのです。

この日がユダヤの暦の始まりとされたように、神が、悩むイスラエルにエジプトでなしてくださった恵みの記憶は、イスラエルの信仰の本質を構成します。イスラエルにとって、神とは自分たちを苦しいエジプトから救い出してくださったお方です。彼らにとっての神は、何か絵に描いた餅のようなものではありません。単なる抽象的な観念でもありません。具体的な恵みの記憶に基づいています。彼らをエジプトから救い出してくださった方なのです。それは現実に生きて働いておられる生ける神です。実際に彼らを滅びから救い出してくださった方です。

そして、この「過越」の恵みの記憶がイスラエルの信仰を養い育みました。彼らを慰め、励まし、力づけ、生かします。そうして、彼らの信仰の通りに、苦しいエジプトから救い出してくださった神の恵みを、今現在の事実として、最もダイナミックに現実に体験していくこととなります。祭りは一週間行われ、「悩みのパン」と呼ばれる

種なしパンを一週間食べ続けて、エジプトでの苦しみとそこから救い出された恵みを思い出しました。

「過越の祭り」に続いて教えられるのは「七週目の祭り」です(9~12)。これは過越から「七週目」に祝うということで「七週目の祭り(五旬節、ペンテコステ)」と呼ばれます。最初に大麦を収穫するのに「かまを立ち穂に入れ始め」、その後は小麦の収穫を終えて収穫し終えるまでがおよそ「七週間」ということで、「七週目の祭り」と呼ばれるのです。つまり、これは大麦と小麦の収穫を神に感謝する、要するに穀物の収穫感謝祭なのです。

それで、この時には「神が賜わる祝福」に感謝して「進んでささげるささげ物」を神にささげます。自分の家族に加えて、「男女の奴隷」、「レビ人」、「在留異国人、みなしご、やもめ」を祝宴に招いて一緒に食事をします。そうすることで神の恵みを分かち合い、同時に恵まれた喜びを身近な隣人に分かち合います。「喜びなさい」と言われているように、これは大きな喜びの時なのです(11)。

三つ目に教えられるのは「仮庵の祭り」です(13~15)。「仮庵」とは「仮住まい」のことですが、木の枝で造った仮小屋の中で寝泊まりしながら一週間不便な生活を過ごすことで、神がイスラエルをエジプトから救い出して荒野で「仮庵に住ませた」ことを思い出しました。

「共に喜びなさい」と言われます(14)。「仮庵」に住んで果たして何が喜ばしいのかと思いますが、それは確かに不自由な苦難の思い出ではあるのですが、それでも、それは単なる不便な苦しい生活ではありません。奴隷の国エジプトを出て、約束の地カナンを目指す旅でもありました。すなわち、そこには希望があったのです。今は「仮庵」住まいの不便な日々だけれども、やがて必ず神の約束の地に入ることができるという希望がありました。そして、その信仰の通り、彼らは約束の地カナンに入ります。カナンに入り、「仮庵」ならぬ立派な家を建てて、そこで平穏に生活することになります。

でも、その時、かつての不便さを忘れぬよう「仮庵の祭り」を祝えと神は命じます。年に一度「仮庵」に一週間住むことで、神がエジプトから救い出してくださった恵みを思い出して感謝するのです。そして、荒野の時代と現在の自分たちとを重ね合わせ、今はこの世の「仮庵」に住みながら苦しく不便に生活しているものの、やがて永遠の約束の地に入ることができるという希望を抱いて天路歷程の旅路をしているのであることを覚えて、神に感謝します。

以上が「仮庵の祭り」の元々の意味なのですが、この申命記の説明にはすべて省略されています。ここでは、13節に「あなたの打ち場とあなたの酒ぶねから、取り入れが済んだとき」とあるように、「仮庵の祭り」がぶどうを中心とする果物の収穫感謝祭であるという事実だけに注目して記されています。つまり、先の穀物の収穫感謝である「七週目の祭り」と、果物の収穫感謝である「仮庵の祭り」とは、いずれも日毎の糧を与えて生かして下さっている神の恵みに感謝する時と言えます。これらに救いの恵みを感謝する「過越の祭り」を合わせて総合すると、これらイスラエルの三大祭りとは、要するに、神の民イスラエルに生きるいのちを与えて生かし、滅びから救い出してくださっている神の恵みを感謝する感謝祭なのです。それで、これらの祭りを祝うために、「年に三度」、「あなたの神、主の選ぶ場所で、御前に出なければならない」と命じられます(16,17)。滅びから救われ生かされている恵みを感謝するのですから、「主の前には、何も持たずに出てはならない」とも言われます(17)。「あなたの神、主が賜わった祝福に応じて、それぞれ自分のささげ物を持って出なければならない」と言われるのです(17)。

そして、最後の18節以降では、イスラエルの役人の任命について教えられます。これは、一見、これまでの三大祭りと関係ない規定のように見えますが、そうではありません。いわば、祭りの補足規定として、これらの祭りが毎年きちんと規則正しく実行されるために、責任をもって民を指導し監視する「さばきつかさ(裁判官)」とその補佐をなす「つかさ(書記官あるいは行政官)」を立てるよう命じられます。彼らは、人を偏り見ることなく、賄賂を取らず、さばきを曲げずに、「正義を、ただ正義を追い求め」て、神の前に正しく祭りを実行します(19-20)。

「アシェラ像」「主の憎む石の柱」と言われるように、土着の偶像宗教と混合しないよう、しっかりと監視しなければなりません(21-22)。こうして、私たちを生かし、滅びから救い出してくださる神の恵みを後の世代に語り伝え続けたのでした。

私たちは、この世に生を受け、キリストの血をもって罪贖われて、今は天路歷程の旅路を歩んでいます。神に愛され生かされている恵みを思い出しては感謝し、喜びを隣人に分かち合いながら、生ける神の恵みを後の世代に語り継いでいくよう、主の御名により祈ります。